

1章 1～2世紀の世界

要点

◎地中海周辺…ローマ帝国

①前史

前8世紀にティベル河畔に作られた都市国家ローマは、前5～前3世紀にかけてイタリア半島の諸都市を支配下に組み込んだ。

前3世紀からイタリア半島外でのローマ支配地（属州）の拡大を進め、前1世紀後半には**オクタウィアヌス**が地中海沿岸地域を統一しローマの支配下とした。前27年、オクタウィアヌスの下でローマは共和政（国家に君主のいない政治体制）から帝政へ移行した。前1世紀後半から後2世紀末までの約2世紀間、ローマ帝国は「**ローマの平和**（パックス＝ロマーナ）」と称される繁栄期を迎えた。

②1～2世紀

(1) キリスト教の成立

1世紀初め、ローマ帝国支配下にあったパレスチナで**キリスト教**が生まれた。**イエス**は民族や貧富の差なく神からの救いを与えられると説いた。彼は反逆者として刑死したが、その教えは弟子（使徒）たちにより広まっていった。

(2) 五賢帝時代

「ローマの平和」の後半に当たる時代が五賢帝時代（96～180）である。五賢帝時代とはネルヴァ帝・トラヤヌス帝・ハドリアヌス帝・アントニヌス＝ピウス帝・マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝と続く五人の皇帝の時代をさす。**トラヤヌス帝**（位98～117）時代がローマ帝国の最盛期で、帝国の領域は最大となり、北はライン川・ドナウ川を越え、南は北アフリカ、東はメソポタミア、西は大西洋に達した。属州にはローマ風都市が建設され、ロンディニウム（現在のロンドン）・ルテティア（現在のパリ）・ウインドボナ（現在のウィーン）など今日まで残るものも数多い。

(3) ローマ市民権

帝国全土には道路網が整備され、ローマ文化が広がっていった。**ローマ市民権**もイタリア半島の市民から属州の上層市民にまで付与されていった。イタリア半島に居住する者と属州民との法律上の区別は薄れ、等しくローマ帝国内の市民との意識が地中海世界に広がっていった（212年には**カラカラ帝**により、ローマ帝国内の全自由民にローマ市民権が与えられた）。

(4) 商業・交易

この時代は経済活動も盛んで、地中海世界のみならず、陸路・海路を用いてアラビア半島・インド・中国（漢王朝）との交易も行われていた。地中海地域の商人が直接中国を訪れることは少なく、中継する商人や国家（パルティアやクシャーナ朝）が存在した。

▼2世紀の世界



◎イラン…パルティア（アルサケス朝）

①前史

前3世紀、イラン系遊牧民の族長アルサケスがイラン高原に**パルティア**を建国した。前2世紀後半から前1世紀には、西はユーフラテス川から東はインダス川に達する広大な領域を支配した。パルティアはローマと漢王朝の中間に位置し、東西交易によって繁栄した。中国史書では、パルティアはアルサケスの名の音訳で「安息」と表記された。

②1～2世紀

(1) 交易活動

後1世紀、パルティアは西でローマ帝国と、東でクシャーナ朝と境を接した。パルティアは国内を通る東西交易路で**隊商**（ラクダに荷を載せ、隊を組んで旅する商人）の物資に課す税を主要な財源にした。そのため積極的に隊商貿易を促し、東西交易の発展につながった。

(2) 衰退

ローマ帝国とは戦争と平和を繰り返した。2世紀にはトラヤヌス帝時代のローマ帝国にメソポタミアを奪われ、同世紀後半にはたび重なる戦争で疲弊し、パルティア国内各地で反乱が起こり衰退に向かった。

◎インド…クシャーナ朝・サータヴァーハナ朝

①前史

前3世紀、南端部を除くインドを統一したマウリヤ朝の**アショーカ王**は篤い信仰心から第3回仏典結集を行い、インド各地への布教にも力をそそいだことで仏教が発展した。前2世紀にマウリヤ朝が滅亡すると、西北インドにはギリシア系のバクトリアやイラン系のパルティアが侵入した。

②1～2世紀

(1) クシャーナ朝

後1世紀に、西北インドにはイラン系の**クシャーナ朝**が建国した。この国は中央アジアからガンジス川中流域に至る地域を支配し、ローマ帝国と漢王朝の中間に位置したことで東西貿易で繁栄した。2世紀の**カニシカ王**の時代に全盛期を迎え、仏教を保護した。

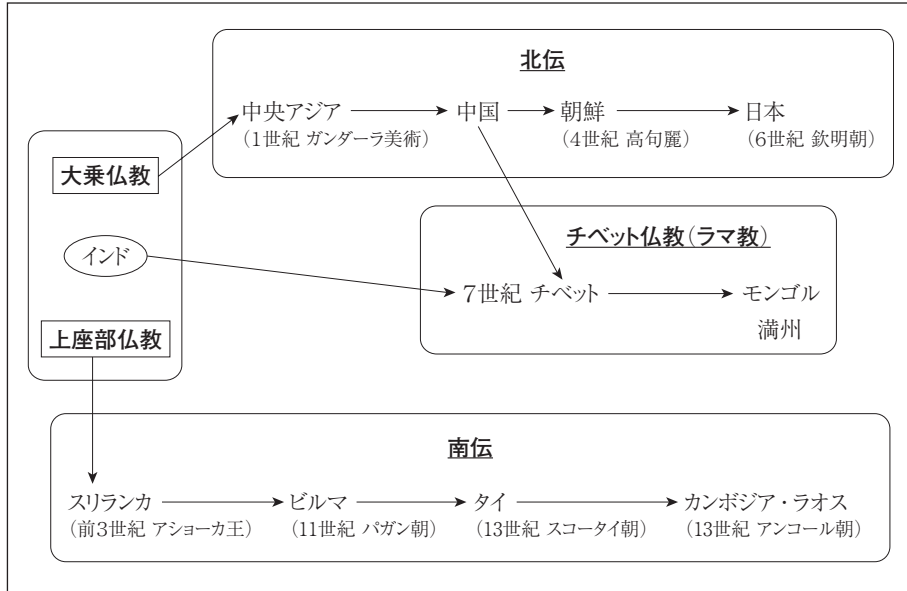
(2) 仏教の興隆

クシャーナ朝期には、ヘレニズム文化の影響（ギリシア式彫刻の影響）を受けた仏像が制作された（**ガンダーラ美術**）。また出家者の悟りを重視する上座部仏教に対して、衆生（命ある万人）の救済をめざす**大乘仏教**が盛んとなった。

(3) サータヴァーハナ朝

この時代のデカン高原には、前1世紀に興った**サータヴァーハナ朝**が存在した。この国は季節風（モンスーン）を用いた海上交易で繁栄し、ローマ帝国や東南アジアと交流した。季節風は6月から9月に海から陸への南西風が、10月から5月には陸から海への北東風が吹く。

▼仏教の伝播



◎東南アジア…扶南・チャンパー

1～2世紀にはインドシナ半島南部に**扶南**や**チャンパー**が成立した。メコン川下流域の扶南では、海上交易が盛んに行われた。港市国家扶南の外港であるオケオの遺跡からは多数のローマ金貨が出土している。インドシナ半島東南部のチャンパー（林邑）も海上交易の中継地として繁栄した。

◎中国…後漢

①前史

前3世紀（前202）に建国した漢（前漢）は、**武帝**（位前141～前87）の時代に全盛期を迎えた。武帝は儒学を官学とし、儒学の主要文献を研究・教授する五経博士を置いた。

武帝は対外積極策を採り、**張騫**を西方（アム川上流）の大月氏に派遣し、両国での匈奴挟撃を画策した。挟撃計画は実現しなかったが、張騫の派遣を機に不明であった西域事情が判明し、漢王朝と内陸のオアシス都市との交易が活発化した。ここで用いられた交易ルートが「**オアシスの道**（絹の道；シルクロード）」である。胡桃（クルミ）・胡麻（ゴマ）・胡瓜（キュウリ）など、「胡」のつく品々は西方伝来のものである。オアシスの道に加え、南ロシアからアルタイ山麓を経てモンゴル高原に至る「**草原の道**」も紀元前から利用され、遊牧民の活躍の場となった。

前漢は前1世紀末からの宮廷内の争いで混乱し、後1世紀初めに滅亡した。

②1～2世紀

(1) 後漢の成立

一時の政治混乱の後、25年に漢王朝の一族である劉秀（**光武帝**）が後漢を再建した。後漢も西域経営に熱心で、オアシスの道沿いの都市を治めた西域都護の**班超**は、1世紀末に部下の**甘英**を大秦国（ローマ）へ派遣することを試みた。甘英は途中シリアまで至り引き返した（パルティアがローマ帝国と漢王朝の直接交流を妨害したとされる）。

(2) 「海の道」の発展

オアシスの道・草原の道よりは遅れるが、紀元前後の頃より「**海の道**」も東西交易の場として用いられるようになる。1世紀にエジプトのギリシア人船乗りの著した『エリュトウラー海案内記』には紅海・ペルシア湾からインド洋・中国に至る物産や交易情報が記されている。

また後漢後期の166年には「**大秦王安敦**」の使者と称する者が海路から日南（ヴェトナム中部）を訪れた記録が残っている（大秦王安敦とは、ローマ皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス帝に該当するとされる）。

(3) 後漢の滅亡

後漢は2世紀中期以降に政治が乱れ始めた。宦官勢力が多く儒教官僚を迫害する事件も発生した(党錮の禁)。後漢時代に発展した、儒教の經典の字句解釈を主とする訓詁学の学者として名高い鄭玄も、党錮の禁の影響で獄につながれた。184年には太平道の張角が黄巾の乱を起こし、これを機に後漢は無力化し3世紀前半に滅亡した。

▼草原の道・オアシスの道・海の道

